みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

An Ecological Approach to the Chipewyan Caribou Hunting System

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 煎本, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004514

チペワイアンのトナカイ狩猟活動系

——生態人類学的視点から——

煎　本　　孝*

An Ecological Approach to the Chipewyan Caribou Hunting System

Takashi Irimoto

Field study in ecological anthropology was done among the Caribou-Eater Chipewyan of northern Saskatchewan, Canada. Direct observation/active participation was the methodology used for recording and analyzing their caribou hunting system. The subsistence activities of the Chipewyan are classified in this article and are recorded in terms of time-space use and participant involvement. The five major categories of activities are:Food getting (FGA), food processing (FPA), sheltering (SHA), hide preparation (HPA) and manufacturing (MA). The three principles for structuring systems of activities on the basis of individual variations, particularly age and sex, are: *temporal sequence* of activities, *allocation* and *combination* of activities. The various categories of Chipewyan subsistence activities are organized into a system of activities, called here the Chipewyan caribou hunting system.

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. 研究対象と調査方法
Ⅲ. チペワイアンの生業活動
1. 季節的移住の型と年間活動空間
2. 生業活動の分類
(i) 食物獲得活動
(ii) 食物加工活動
(iii) 住居設営活動
(iv) 毛皮加工活動
(v) 道具製作活動
3. 生業活動の時間—空間利用
Ⅳ. チペワイアンのトナカイ狩猟活動系
1. 活動の時系列
2. 活動の配分と活動の重積
3. トナカイ狩猟活動系
Ⅴ. 結　論

* 国立民族学博物館第1研究部

I．序　　論

Julian Steward [1955] の多系進化に関する先駆的研究以来，文化生態学は人類学における一分野として広く認められるに至った。しかし，この分野における最近の研究では，むしろ生物学を重視する傾向があり [Rappaport 1956, 1967; Vayda and Rappaport 1968]，これは Steward が文化を強調したのと拮抗するかに見える。現在，文化生態学の分野において，この両者の研究理論は対立しながら，狩猟採集民の研究手段として用いられているという状態である [Damas(ed.) 1969a, 1969b; Lee and DeVore (eds.) 1968]。

しかし，ヒトは純粋に文化的存在でもなければ，逆に単なる生物学的有機体でもない。ヒトはその活動 (Human activity) を通して，自然との間に相互関係を形成する。このヒトの活動については，文化人類学の分野でも，また自然人類学の分野でも，十分には研究されてはいなかったように思われる。この意味から，人類の生活，あるいは人類の自然誌 [Watanabe (ed.) 1977; 伊谷・原子編 1977] は，生態人類学的視点からの研究対象となる。著者はこれらの研究をふまえながら，生態人類学を自然と人間との関係の研究と広義に定義する。そこではヒトの活動に焦点をあて，ヒトと自然との間の全体的関係を体系 (System) として捉える。

この生態人類学的視点からのヒトの生活の研究において，従来見落されていた重要な研究対象は，人々の日々の活動である。長期間にわたる野外調査に基づいた活動の量的記録はヒトの活動の体系（活動系）を明らかにするため必須である [Irimoto 1973, 1977a, 1977b, 1977c, 1977d]。さらに，ヒトの活動系の研究においては，個体と集団との関係をヒトの個体差という点から検討する必要がある。ヒトの生物学的特性に基づく個体差の中でも，性差・年令差は基本的なものである [Yape and Bourne (eds.)1957]。生業活動における個体差に基づく技術や技量の差は，分業や集団構成の要因と成り得る。分業の問題は，従来から社会的，経済的問題として取り上げられて来ていた [Durkheim 1933; Chapple and Coon 1947; Herskovits 1952] が，生態人類学的視点からは，分業を個体差による活動の配分の問題として捉えることができる。

以上のような観点から，この論文ではチペワイアン (Chipewyan) のトナカイ狩猟活動を中心とする諸活動の体系の記載，分析を行なう。

Ⅱ．研究対象と調査方法

新大陸の北方アサパスカン・インディアンに属するチペワイアンの研究については，既に著者による若干の報告がある [Irimoto 1977e, 1979a, 1979b, 1980]。彼等は，カナダ亜北極圏の針葉樹林帯（タイガ）における大形獣狩猟民で，特に北米産トナカイ (*Rangifer articus*) を，生活の基盤としている。彼等は現在，著者が L-31 と名付ける居住地――ここには毛皮交易所，小学校，教会，医療施設がある――を季節的移住の根拠地として各季節ごとに森林の中の野営生活を送る。

調査地は盾状地 (Pre-Cambrian Shield) に位置し，植生は針葉樹林帯（タイガ）と凍土帯（ツンドラ）との間の生態的移行帯にあたる。動物相の特徴として，夏には凍土帯へ，冬には森林帯へと季節移動を行なうトナカイがあげられる。

カナダ政府インディアン局は，1975年において，292名の登録インディアンを居住地 L-31 に認める。しかし，ここにはさらにインディアン条例の適用を受けない57名のチペワイアンが居住しており，彼等は民族的にはチペワイアンであるが，行政的にはインディアンとしての条約的地位を持たない。しかし，この論文においてはチペワイアンという用語を登録インディアン，非登録インディアン両者を含めた民族的集団として用いることにする。

著者は，1973年12月から1974年1月にかけての予備調査，1975年7月から1976年10月における集中的な生態人類学的調査研究を行なった。調査期間は，15カ月間である。この間，L-31 居住地における全般的資料収集を行ない，その後，実際の狩猟活動をはじめとする生業活動に参加するため季節的野営生活を彼等と共にした。ここでは，個体追跡方法，直接観察方法に基づき，チペワイアンの活動の記載，分析を行なった。

Ⅲ．チペワイアンの生業活動

居住地 L-31 におけるチペワイアンにとって，この居住地は季節的移住における根拠地となる。森林の中の野営地は，各季節ごとにそれぞれの生業活動を行なうために設営される。夏と冬の野営地は，二つの主要な季節的野営地であるが，前者においては漁撈活動，また後者においてはトナカイ狩猟活動と罠猟が主として行なわれる。さらに，期間は短いが，秋の野営地が冬の野営地の近くに設営され，ここでは漁撈活動と小形動物の狩猟活動が行なわれる。また，春の野営地は，罠猟と漁撈活動のため

に設営される。以下，チペワイアンの生業活動と季節的移住について記載する。

1. 季節的移住の型と年間活動空間

チペワイアンの季節的移住を図1に示した。彼等は年間少なくとも3回は，居住地L-31に戻る。それらは降誕祭（及び新年），復活祭，そしてインディアン条約日である。降誕祭，復活祭においては，ローマ・カトリック教会においてミサがあり，インディアン条約日には，政府インディアン局による条約金の交付が行なわれる。また，居住地にある毛皮交易所で，チペワイアンは毛皮を売り，季節的野営生活に必要な物資を購入する。

図1において，トナカイの季節移動をチペワイアンの季節移動の上に合わせ示したが，冬期，この両者が重なり合う。トナカイの南下に合わせて，逆にチペワイアンが北上するのである。しかし，夏期，彼等は食料源を魚とオオシカ（*Alces alces*）に依存する。商業的漁撈活動は6月から9月にかけて行なわれるが，漁獲物は居住地L-31にある魚切り身製造工場に運ばれるため，夏の野営地は居住地まで1日以内の距離に位置する。居住地においては定住化の傾向が観察されるが，小学校制度はその要因の一つである。冬期間，居住地において賃金労働の機会は稀であるが，政府による生活保護，養老年金などの経済的援助がある。学校制度，賃金労働，その他の現金収入は，彼等が居住地に定住する傾向の原因になっている。

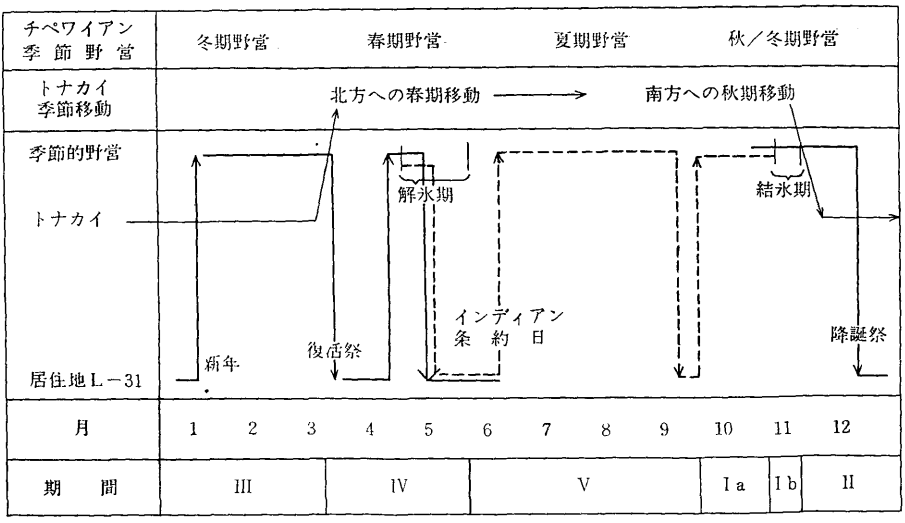


図1　チペワイアンの季節的移住型。実線は犬ゾリによる移動，破線はカヌーによる移動を示す

従って，今日の居住地におけるチペワイアンの季節的移住は，森林の生活と居住地の生活という両極の間にある。居住地の生活はそこに多くの人々が集合している故に，自然的，超自然的敵に対する安全地を確保し，また食料不足の際の分配参加を可能にする。しかし，他方で，居住地の経済は恒常的基盤を持つ食料生産に支えられてはおらず，同一場所における長期間の定住は困難となっている。従って，定住は結果的に彼等の間に敵対的な関係を生じさせる。こうして一部のチペワイアンは，森の中のより静粛な生活を求める。トナカイの群れが到来すれば多量の肉を得ることができる。森の中での活動は厳しいが，居住地における人間関係上の闘争を避けることができる。こうして，それぞれのチペワイアンは，経済的，社会的要因に基づき，各々の季節における季節的移住の型を決定する。

年間活動空間とは，彼等が季節的移住生活を行なうに際して利用するすべての空間である。活動空間という概念は他の集団による侵略に対して防禦する必要のある縄張りや所有権のある土地という意味を含まない。居住地 L-31 のチペワイアンは何らの政治的単位をも形成しておらず，この居住地はある一定場所における人々の集合であるにすぎない。

さて，年間活動空間を明らかにするにあたり，Saskatchewan 州政府によるビーバ統計調査，及び，著者により得られた彼等の季節的活動に実際に利用される空間に関する情報が用いられた。前者の資料は，ビーバの罠猟の際の獲得数の制限枠を決めるために，州政府がチペワイアンの情報に基づいて地図上にビーバの巣の地点を記入したものであり，この地域は彼等が罠猟を通して渉猟している範囲を示す間接的資料になる。罠猟活動については，州政府により区域の規制が設けられている。しかし，彼等が実際に罠猟に利用している空間はこの規制区域を越える。

漁撈活動，狩猟活動に利用される地域については規制はなく，彼等の活動空間は罠猟のための規制区域の外に広がっている。例えば，トナカイ狩猟活動について見れば，彼等はトナカイの行く所に行ってそれを狩るのであるという考えを持ち，実際その活動空間は，Northwest 準州，あるいは，Manitoba 州にまで及ぶことがある。これら，罠猟活動，漁撈活動，狩猟活動に利用される地域を総合して，年間のチペワイアンの活動空間とすると，それは Northwest 準州と Manitoba 州を境界とする Saskatchewan 州北東部となり(1975—1976年において，トナカイの群れは Saskatchewan 州北部に到来し，チペワイアンは州外にまで出る必要がなかった)，総面積は，26,900 km^2 となる。従って，年間活動空間におけるチペワインアの人口密度は，0.013人/km^2 となる。

活動空間の季節変化は季節ごとの生業活動の種類と関係がある。夏期の漁撈活動において，彼等はこの地域にある大きな湖と，そこから流出する川を利用し，この空間面積は，4,700 km^2 であり，年間活動空間（冬期の活動空間）の17.5%を占める。冬期の活動空間が夏期の活動空間にくらべて拡大するのは，罠猟，狩猟において，湖の外に広がる森林地帯が利用されるからである。各季節ごとの野営地を中心とする活動空間については，活動の種類別，活動者別に，直接観察に基づいた資料により後に詳細に述べることにする。

2. 生業活動の分類

チペワイアンの生業活動の分類は，実際の活動の観察に基づいた人類学徒の分析的概念である。今回の調査において以下の諸活動が観察された。即ち，食物獲得活動，食物加工活動，食物消費活動，住居設営活動，毛皮加工活動，道具製作活動，探査活動，育児活動，儀礼活動，遊戯活動，睡眠および休息である。これら諸活動のうち，以下の活動がチペワイアンのトナカイ狩猟活動系の構成に直接関わり合っており，従ってこの論文では特に詳細に記載，分析される。これらは，食物獲得活動 (Food getting activity: FGA)，食物加工活動 (Food processing activity: FPA)，住居設営活動 (Sheltering activity: SHA)，毛皮加工活動 (Hide preparing activity: HPA)，道具製作活動 (Manufacturing activity: MA) である。

(i) 食物獲得活動 (FGA)

食物を獲得する活動には，狩猟活動，罠猟活動，採集活動，漁撈活動が含まれる。狩猟活動は，徒歩あるいはカヌーによる無積雪期狩猟と，カンジキ (Snowshoes) あるいは犬ゾリを使用する積雪期狩猟に分類できる。同様に，漁撈活動も，異なる季節による異なる技術の使用という観点から，夏期の水面漁撈と冬期の氷下漁撈とに分類できる。

無積雪期狩猟は，積雪のない地上を徒歩により行なう狩猟活動であるが，水上輸送手段としてカヌーがしばしば用いられる。他方，積雪期狩猟はカンジキを使用するということが特徴であり，この時，輸送手段として犬ゾリが用いられることがある。トナカイ狩猟活動はこの積雪期狩猟活動の一つとして最も重要なものである。

狩猟活動は，戦略としての狩猟方法という観点からみると，粗放的狩猟方法と集中的狩猟方法に分けることができる。トナカイ狩猟活動に関していえば，前者は積雪のまだ深くない冬の前半，トナカイの群れが針葉樹林帯を南下している時に行なわれる

方法である。この時期，トナカイの群れの移動速度は速く，また，群れの大きさも比較的大きい（1975年冬期における著者の観察によると，10頭から100頭の群れになっている）。チペワイアンは，犬ゾリの使用により，広範囲にわたりトナカイの群れを捜索する。トナカイの群れの存在は雪上の足跡により確認することができるが，トナカイの移動速度が速いため，チペワイアンは特定の群れを森林の中に追跡することはしない。彼等は逆に，開けた場所でトナカイの群れに遭遇する機会を狙うのである。この時期は，森林の中の湖や川は既に結氷しており，雪に覆われている。トナカイの群れは移動に際してこの開けた場所を通過し，また夜間は湖上に出て眠る。

トナカイの群れを発見すると，チペワイアンは射程距離内に接近する。森にかくれて湖上のトナカイが近づくのを待ち伏せすることもある。犬ゾリを繋ぎ，狩人だけが森の中を通って，湖上のトナカイに近づくこともある。射撃は，.30-.30大口径小銃で行なわれるが，.22小口径小銃も使用されることがある。トナカイの群れは即座には逃避しない。逆に，雪上にそのまま立ち，狩人の方を見ているだけである。やがて，次々にトナカイが倒れるとはじめて，残りの群れは森林の中に逃げ入ろうとする。狩人はトナカイの逃げる方向に犬ゾリを走らせ追撃を行なう。従って，トナカイ狩猟活動それ自体は困難ではない。しかし，トナカイの群れと遭遇するのは機会に頼らざるを得ないのである。

以上のことから，粗放的狩猟方法の戦略は，トナカイを発見する機会を増加させるために犬ゾリの使用により広範囲を覆うことであると考えることができる。さらに，実際の活動の記録によると，この方法による狩猟活動は罠猟活動と組み合わされることが多い。これは，食物獲得の予測が困難である粗放的方法による狩猟活動と活動自体が安定している罠猟とを組み合わせることにより，活動全体としての結果である生産を保証しようとするものと考えられる。なお，この現象は活動の重積として捉えられるが，これについては後に詳しく述べる。

粗放的狩猟方法とは対照的に，集中的狩猟方法は特に冬の後半に行なわれる。1月から3月にかけて，トナカイは小さな群れになって森林の中に散在する。森林の深い積雪はトナカイの行動域を規制する。森林帯の雪は，凍土帯の硬い雪と異なって軟らかくトナカイは雪に沈み，そこでの移動が困難になるからである。しかし狩人は，カンジキ（Snowshoes）を使用することにより雪面上の歩行が可能であり，トナカイに時には数メートルの至近距離にまで接近することができるのである。チペワイアンはトナカイの足跡を見つけると，その特定の群れを森林の中にまで集中的に追跡し，殺す。積雪はトナカイの行動において負の要因となるが，カンジキを履いた狩人にとっ

ては，逆に正の要因となるのである。

(ii)　食物加工活動 (FPA)

食物加工活動とは食物消費に先立つ材料の処理であり，食物調理活動と食物保存活動が含まれる。食物調理活動とは，毎日の食事の準備であり，材料の加工，食品の準備，後片付けなどで，食事に関する一連の活動である。これに対して食物保存活動とは，将来のための保存食料の製造にかかわる活動であり，乾燥・燻製魚や乾燥・燻製肉の製造が重要である。乾燥・燻製肉は，さらに斧の背を用いて石の上で粉砕し，粉にする。また，トナカイの骨からの油の抽出，骨を破砕して骨髄を取り出しておくことなども，食物保存活動に含まれる。

(iii)　住居設営活動 (SHA)

住居設営活動とは，季節的野営生活における天幕，丸木小屋の設営，維持のための活動である。丸木小屋の設営は，秋期において特に重要な活動である。彼等は冬期間，帆布張りの天幕だけで生活することも可能であるが，冬の野営地に丸木小屋を設営することがしばしばある。この際でも，狩猟，罠猟の途中での野営には天幕が用いられる。不時露営においては雪の上に大きな焚火が一晩中作られ，この周りに針葉樹の枝や葉を敷いて帆布を被って寝る。夏期における狩猟活動の途中では，天幕は使用されず，露営である。

住居維持のための活動とは毎日の家事活動であり，これには掃除，洗濯，水汲み，火起こし，火の管理，犬の餌の投与，薪の切り出し，薪割りなどがある。特に冬期間，暖房保持の必要性から薪割りや火の管理をはじめとする家事活動は彼等にとって重要な活動となるが，後述するようにすべての家事活動が女性の仕事となっているのではない。

(iv)　毛皮加工活動 (HPA)

毛皮加工活動とは，動物の毛皮を鞣す活動である。鞣し皮は種々の道具を製作するための材料として用いられることになる。毛皮加工活動は次に述べる道具製作活動の一つに加えることも可能であるが，彼等の活動の中で時間的，労力的に大きな役割りを持つと考えられるので，この論文においては独立した範疇を設けた。毛皮加工活動の特徴は，チペワイアンの諸活動において原材料の獲得活動から道具製作活動に移行する時間的中間段階を形成することにある。

原材料と加工技術に応じて，毛皮加工活動はオオシカ皮加工活動，トナカイ皮加工活動，毛皮獣の皮加工活動に分類される。さらにはじめの二つに関しては，時間的順序に従って，活動の小分類が可能である。即ち，オオシカ皮加工活動においては，皮を水に浸すこと，毛の除去，木枠への皮張り，内皮（脂肪）の削除，外皮の削除，鞣し，燻し，柔軟化，乾燥，燻し（再度）が見られる。トナカイ皮加工活動においては，内皮，外皮の削除の際に，皮を張る木を必要としない。これは，トナカイの皮の大きさがオオシカよりも小さく，また皮の厚さも薄いためである。毛皮獣の皮加工活動においては毛皮は鞣されず，毛を残したまま乾燥され毛皮交易に供される。

(v)　道具製作活動 (MA)

道具類を製作する活動には以下のものがある。皮，帆布を材料としての製作活動（皮紐，腱糸，皮袋，狩猟用袋，犬ゾリにつける収納袋，猟銃袋，犬の首輪，手袋，燻し皮靴，カンジキの皮紐），羽を材料としての製作活動（寝具の中への詰め物），骨を材料としての製作活動（骨製削器），ビーズを材料としての製作活動，木を材料としての製作活動（戸外の棚，鞣し用テント，毛皮獣の皮乾燥用木板，小犬の囲い，斧の柄，犬ゾリ，カンジキの木枠など）。

以上，チペワイアンの生業活動の分類について述べたが，それぞれの活動の時間—空間利用については次に記載する。

3.　生業活動の時間—空間利用

生業活動の年間の時間利用は，活動の季節性，あるいは活動の年周期として捉えることができる。そこで，生業活動の季節的変化に基づいて，一年を5期間に区分する（図1下段を参照）。

期間Ⅰは10月—11月初旬であり，これは夏における漁撈活動の後，冬のトナカイ狩猟活動以前の時期である。この期間は，さらに期間Ⅰaと期間Ⅰbに分類できる。期間Ⅰaは，水面漁撈活動と小形動物の狩猟活動により特徴づけられる。そしてこの期間は，水面漁撈活動の終了をもって終わる。これに対して，期間Ⅰbは結氷期と重なり，保存食料への依存がその特徴となる。また，この時期には氷下漁撈の開始が見られる。ただし，氷下漁撈は期間Ⅰbの始まりと共に開始されるわけではない。氷の状態の不安定な結氷期においては，水面漁撈，氷下漁撈共に行なうことができないのである。例えば，1975年冬期における最後の水面漁撈活動は11月1日に観察されたが，その後二日間は漁撈活動不可能であり，11月4日に危険な氷の状態をおして氷下に網

が設置された。

期間Ⅱは，トナカイ狩猟活動の開始により始まり，これは11月の一部と12月にあたる。この時期，粗放的方法によるトナカイ狩猟活動をはじめ，罠猟活動，氷下漁撈活動が行なわれる。期間Ⅲは1月から3月であり，この時期の特徴は集中的方法によるトナカイ狩猟活動である。そして，氷下漁撈活動の頻度は低下する。

期間Ⅳは冬から夏への移行期の4月から5月にあたり，解氷期と重なる。この時期，既にトナカイの群れは北方へ季節移動し，森林帯からは姿を消している。しかし，小さな川や湾が最初に解氷し始め，ここで水面漁撈を行なうことができる。さらに，南方からの渡り鳥の狩猟，小形動物の罠猟や狩猟が行なわれる。また，食物保存活動として，冬に獲ったトナカイの肉の乾燥・燻製肉製造活動が特徴的である。最後に，期間Ⅴは夏にあたり，6月から9月である。この時期，湖での水面漁撈活動が主になるが，同時に，食物獲得活動としてオオシカの狩猟活動が重要なものである。

生業活動の空間利用については，直接観察，個体追跡方法により得られた資料に基づいて分析した。その結果，活動空間は野営地内域，野営地近域，野営地外域の三地帯に分割できることが明らかになった。野営地内域とは，野営地そのものであり，天幕，丸木小屋が設営してある森林の中の開かれた場所である。野営地近域とは，地図上での直線距離で野営地から約 1.0 km 以内の地域であり，ここは野営地の外ではあるが，野営地から近距離にある地帯である。これに対して，野営地外域とは，野営地から 1.0 km 以遠の地帯である。以下，それぞれの地域で行なわれる活動について記載する。

野営地外域で行なわれる活動は，狩猟活動，罠猟活動，漁撈活動である。期間Ⅰにおける狩猟活動は徒歩による無積雪期狩猟であったが，活動空間は 50 km^2 で，活動に利用された最も遠い地点は野営地の北 10.0 km であった。また，期間Ⅱにおいては，犬ゾリが交通手段として用いられ，狩猟活動，罠猟活動が野営地外域で行なわれたが，活動空間は 1,200 km^2 に拡大された。最も遠い利用地点は野営地の西 11.0 km，北西 36.8 km，北 50.5 km であった。この期間は粗放的方法によるトナカイ狩猟活動により，彼等が広範囲にわたる活動空間を利用することが，明らかになった。

期間Ⅲにおいて，活動空間は野営地の北西部から北東部へと移行した。これは，期間Ⅱにおいて行なわれていた罠猟が深雪のため不可能となり，そこで利用されていた野営地北西部の地域が利用されなくなったこと，ならびに，トナカイの群れが野営地北西部から移動して，北東部に出現したことによるためである。この期間の活動空間は 400 km^2 であった。冬の後半の森林地帯深雪は，トナカイとチペワイアンの活動

空間を制限し，期間Ⅱに比較して利用空間の減少が見える。この時期，集中的方法によるトナカイ狩猟活動が行なわれた。活動のための野営用からの最遠距離は，北東27.8 km であった。

野営地外域で行なわれる他の活動に漁撈活動がある。期間Vにおいてチペワイアンは水面漁撈活動を行なうが，その利用空間は 800 km² であった。この時の最遠利用地点は野営地の北西 25.0 km，南東 10.3 km，南西 17.8 km，北西 4.8 km であった。この期間，彼等はオオシカの狩猟活動も行ない，野営地外域が利用される。しかし，漁撈活動は，野営地外域で行なわれるだけでなく，野営地近域においても行なわれる。たとえば，期間Ⅰaにおいて，漁撈活動は野営地から 200—1,000 m の距離に刺網を設置することにより営まれ（図2），また，期間Ⅰb，Ⅱにおける氷下漁撈活動において，野営地と刺網設置地点とは 50—200 m の距離となっていた（図3）。期間Ⅱにおいて氷下漁撈が野営地外域で行なわれる場合，刺網は狩猟活動，罠猟活動のために通過する地点に設置され，狩猟活動と漁撈活動との重積を可能にしている。

罠猟活動は野営地外域で行なわれるが，小規模の罠猟は野営地近域においても行なわれることが観察された。この場合，罠は徒歩により設置，点検される。期間Ⅰa，Ⅰbにおいて，罠猟活動はしばしば採集活動と組み合わされ，活動空間は野営地近域

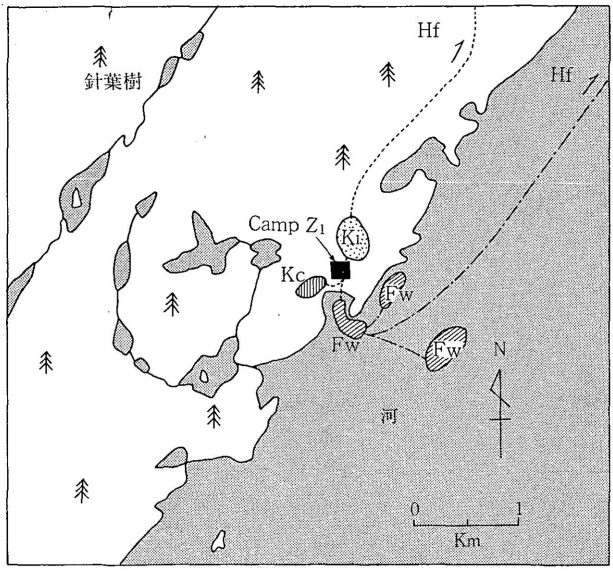


図2　秋期野営地における野営地近域の空間利用（1975年10月9日—12日）
Hf: 狩猟活動（徒歩／カヌー）；　Fw: 水面漁撈活動；
Kc: 住居維持活動（トウヒ小枝採取）；　Ki: 薪採取活動

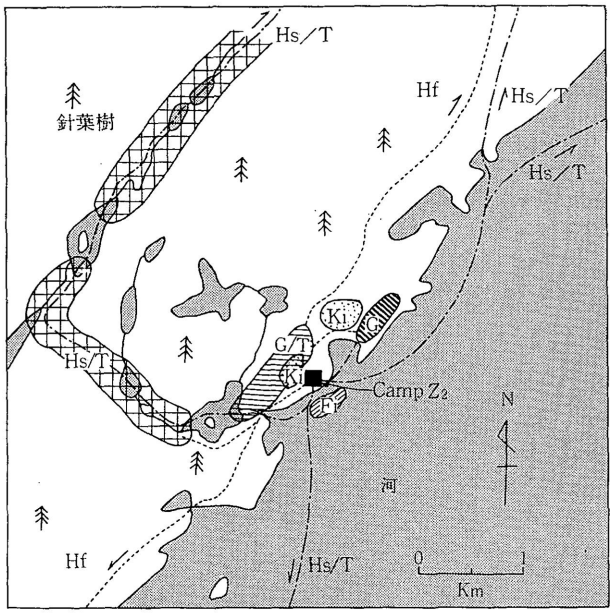


図3　冬期野営地における野営地近域（および野営地外域の一部）の空間利用（1975年10月13日—12月15日）
Hf: 狩猟活動（徒歩）；　**Hs**: 狩猟活動（カンジキ／犬ゾリ）；
T：罠猟活動；　**G**: 採集活動；　**Fi**: 氷下漁撈活動；　**Ki**: 薪採取活動

に留まる。しかし，期間Ⅱのように罠猟活動が狩猟活動と組み合わされると，その活動空間は野営地外域に拡大される。

野営地近域により行なわれる他の活動には，トウヒの小枝採取（天幕や丸木小屋に敷いて床にする），薪の採取がある。これらは夏の間，野営地の近くで行なわれる(図4)。冬の野営地における薪の採取のために，チペワイアンは 300—500 m 離れた山火事跡を利用した。冬期における薪の確保は，暖房，食物加工のため必須であり，冬の野営地の位置は，山火事跡に近く枯木を確保し得る地点が選択されるのである。毛皮加工活動の際，毛皮を燻すのに用いられるカラマツの枯木も，野営地近域で採取される。丸木小屋や戸外の棚の建材に利用されるトウヒも野営地近域で伐採され，野営地に運搬される。

野営地内域は，食物加工活動，毛皮加工活動，住居設営活動，道具製作活動のための利用空間となっている。

以上，チペワイアンの生業活動の時間—空間利用について述べたが，これら諸活動の間の全体的関係，および，その構成に関わる個体の性的—年令的要因について，次に検討する。

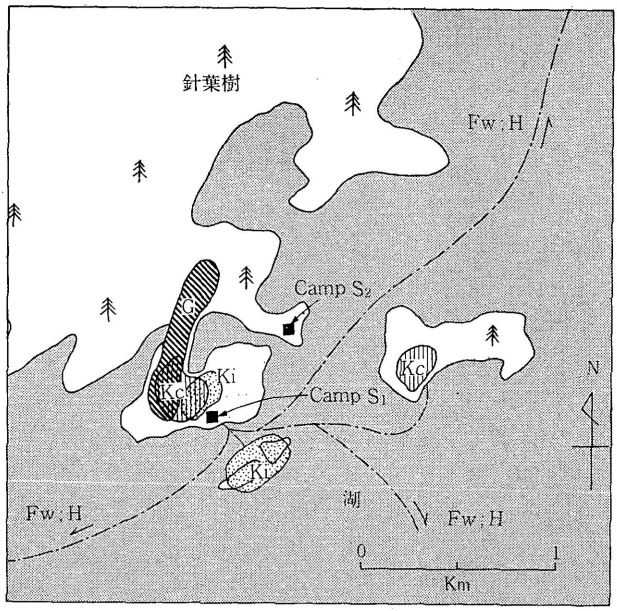


図4　夏期野営地における野営地近域の空間利用（1975年8月1日—3日；8月7日—17日）
H：狩猟活動（カヌー）；　G: 採集活動；　Fw: 水面漁撈活動；
Kc: 住居維持活動（トウヒ小枝採取）；　Ki: 薪採取活動

Ⅳ．チペワイアンのトナカイ狩猟活動系

ヒトの活動は，個体の生物学的側面と環境との間の仲介項としてのみならず，個体の集合である集団と環境との間の総体的関係としての意味を持つ。ここでは，個体の性的—年令的要因が如何なる原理に基づいて集団の活動系の構成に関与しているのかについて検討する。チペワイアンのトナカイ狩猟活動系において，活動の体系を構成する原理として，「活動の時系列」，「活動の配分」，「活動の重積」が明らかにされる。活動の時系列とは，時間的連続性による諸活動の相互関連性であり，活動の配分とは，諸活動の各個体への分配，活動の重積とは，一個体における異なる諸活動の時間的—空間的重ね合わせである。以下に記載するように，活動の時系列，活動の配分と重積は，活動者の個体差，活動の時間—空間利用と関わり合いながら集団の活動体系を形成する。

1．活動の時系列

チペワイアンの生業活動における分類において，食物獲得活動は時間的順序として

食物加工活動に先行する。例えば，トナカイ肉の保存活動は，トナカイ狩猟活動が行なわれ，肉が野営地に運び込まれた後に開始される。実際，期間Ⅱにおいてトナカイ狩猟活動が始まった後，乾燥・燻製肉製造活動が観察され，これは次の期間Ⅲ，Ⅳにまで継続的に見られる。特に，春の期間Ⅳにおいて乾燥肉の製造活動は多くなるが，これはトナカイ肉の供給のない夏の期間Ⅴのための保存食製造のためである。同様の現象は乾燥・燻製魚の製造においても見られる。この活動は，特に期間Ⅰａに見られるが，これは次の期間Ⅰｂにおける漁撈活動の不連続性（結氷期における水面漁撈，氷下漁撈の不安定性）を乗り越えるための戦略的意味を持つものとして考えることができる。

食物獲得活動は毛皮加工活動に先行する。前者の活動により，食物のみならず材料としての動物の毛皮も獲得することができるからである。毛皮加工活動の後，ここで製造された鞣し皮を用いて道具製作活動が行なわれる。手袋，鞣し皮靴の製作活動が完了すると，次にビーズを用いて刺繍がこの上に施される。

道具製作活動は，さらに次の食物獲得活動のために行なわれるものであり，このことは食物獲得活動への正の制御機構として考えることができる。例えば，期間Ⅰにおける集中的な道具製作活動は，期間Ⅱ，Ⅲにおける狩猟活動，罠猟活動を目的とし，時間的順序としてこれに続いてゆくものである。この時期の道具製作活動においては，狩猟時の獲物や狩猟具の運搬袋，犬ゾリにつける収納袋，猟銃袋，ソリ犬の首輪，手袋，鞣し皮靴など，狩猟，罠猟に必要な道具が製作されるのである。

毛皮加工活動における一連の諸活動の時間的関連性については，生業活動の分類の項で既に述べた。この毛皮加工活動は，原材料の毛皮を鞣した段階で工程を一時休止し，完成していない鞣し皮を保存しておくことも可能である。例えば，1975—76年の冬におけるトナカイ毛皮加工活動において，前年の冬に鞣されていた皮がまず取り出され，水に浸して洗われ，乾燥され，燻されるという工程を経て，完成された鞣し皮とされた。そして，これが前述した狩猟活動のための道具製作活動に用いられたのである。しかし，期間Ⅱの最初のトナカイ狩猟の成功後，新しく獲得されたトナカイ皮がその材料になって，毛皮加工活動が行なわれることが観察された。

以上述べたように，チペワイアンの生業活動の分類に関していえば，活動の時系列は，食物獲得活動から食物加工活動へ，食物（材料）獲得活動から毛皮加工活動と道具製作活動へ，さらに道具製作活動から再び食物獲得活動へと続いていることが明らかにされた。次に，この時系列に沿って，諸活動が如何に活動者個体に配分，重積されるのかについて述べる。

2. 活動の配分と活動の重積

個体別の活動時間を表1に示した。調査期間は1975年10月10日から12月15日までの計68日間であり，これは期間Ⅰa，Ⅰb，Ⅱに相当する。調査対象は冬の野営地における総成員9名である。彼等に関して食物獲得活動（狩猟活動，罠猟活動，採集活動，漁撈活動），食物加工活動，毛皮加工活動，道具製作活動における時間利用が個体別に記録された。

個体101から個体105までは，Domestic unit Z-101 の構成員である。Domestic unit とは生産と生殖における基本単位であり，チペワイアンの Domestic unit においては種々の親族構成が見出されるが，基本家族（父母とその子供たち）が基礎になっている。この Domestic unit が双系的に結合して形成された Hunting unit [cf. SHARP1973: 151–163] は異なる段階における生産のための共同単位になっている。Domestic unit および Hunting unit という生業単位とチペワイアンの親族体系との関係については，別稿で詳しく述べられている [IRIMOTO 1979b: 133–206]。個体101は男性であり，1975年において年令71歳，個体102はその妻で年令71歳，個体103は養子でもともとは個体102の娘の息子であり年令15歳，個体104も養子であり，もともとは個体102の息子の息子であるが，同時に後に述べる個体301の息子であり年令6歳である。個体105は Domestic unit Z-104 の成員であるが，当野営地に滞在している時には Domestic unit Z-101 の成員としてその経済活動に参加している。彼は個体102の娘の息子であり，同時に個体103の兄となっており年令17歳である。個体201は Domestic unit Z-102 に属する男性であり年令30歳であるが，この Domestic unit の残りの成員（妻，二人の息子，一人の娘）は，この野営地で生活を共にしていない。個体201の妻は個体102の養女であり，その結果，個体102は個体201の妻の養母とな

表1 個体別の活動利用時間
（1975年10月10日—12月15日）

活動＼個体番号	101	102	103	104	105	201	301	302	303	x	計
HTA	226.0	4.0	174.0	—	55.5	225.0	278.5	—	—	9.5	972.5
GA	—	4.5	2.5	2.5	—	—	—	2.5	2.5	—	14.5
FA	7.0	1.0	7.5	—	—	13.5	23.5	8.0	—	18.5	79.0
FPA	—	39.0	—	—	—	—	3.0	77.0	—	—	119.0
HPA	2.0	44.0	—	—	—	—	2.0	54.0	—	—	102.0
MA-1	—	41.0	—	—	—	1.5	12.5	66.0	—	—	121.0
MA-2	26.5	3.0	15.0	—	—	8.0	20.5	5.0	—	—	78.0
計	261.5	136.5	199.0	2.5	55.5	248.0	340.0	212.5	2.5	28.0	1486.0

っている。個体301は Domestic unit Z-103 に属する男性で年令36歳。彼は同時に個体102の息子であり，また個体101は彼の義父になっている（個体102の前夫は死亡し，彼女は個体101と再婚）。個体302は彼の妻で年令24歳である。個体303は彼等の娘であり年令4歳。なお前述したが，彼等の第一子である個体104は Domestic unit Z-101 の養子となっている。

冬の野営地において三つの Domestic unit，計9名の構成員が生活を営んでいたが，個体の性差に基づく活動の配分に関し，表1の結果から次の事が明らかになった。狩猟活動，罠猟活動は男性優占的活動である。しかし，罠猟活動においては女性がこれを行なうことも観察され，この際，罠猟活動は採集活動と重積されている。一方，採集活動は女性優占的活動であるが，男性もこれを行なう。漁撈活動は，男性，女性共に見られる。しかし，水面漁撈は主として男性により行なわれ，冬期，男性が狩猟活動のため野営地を離れている時に女性は氷下漁撈を行なう。この際，女性は氷下に設置してある刺網を氷上にあげ，漁獲物を得て，それを野営地まで運搬する。しかし，最初に氷下に網を設置するのは男性により行なわれた。

食物加工活動は女性優占的活動であり，これには食物調理と食物保存とが含まれる。もっとも，個体301は彼の妻が大量のトナカイ肉の乾燥・燻製肉製造に忙しい時，数時間であるがこの食物保存活動を行なうことが観察された。男性のチペワイアンは保存食料の乾燥肉，乾燥魚を製造するために必要な知識や技術を持っているが，食物保存活動時間は，女性と比較するとわずかである。毛皮加工活動は女性優占的活動である。しかし，毛皮についている脂肪の削除のため毛皮を木枠に張るのは男性が手伝う。また脂肪の削除においても，男性が妻を手伝っていることが観察されている。家事活動は，掃除，洗濯，水汲み，火の管理等を含むが，女性により行なわれる。しかし，最初に火を起こすことと薪の伐採は，主として男性により行なわれる。もっとも，女性が犬ゾリを使用して薪を伐採することも，調査期間中，観察された。チペワイアンの女性が犬ゾリを使用することはまれであるが，この例において彼女は若い時，父親が怠け者であり，彼女自身が犬ゾリを使用して薪を採取することを学んだという。野営地において薪を割る仕事は男性，女性共に行なうが，もし男性の成員が野営地に居れば，彼等によって行なわれる。家事活動については，さらに年令による仕事の配分が重要になってくるが，これについては再び後で述べる。皮，羽，骨を用いた道具製作活動は女性により行なわれるが，木材を用いた道具製作活動は男性により行なわれる。ただし，木材を用いても燻し用の天幕の設営，小犬のための囲い作りなどは女性によっても行なわれる。他方，皮を用いた道具製作活動でも，犬の首輪製作は男性に

より行なわれる。

次に，期間Ⅲにおける生業活動時間の個体別記録を表2に示す。資料は1976年3月3日から3月14日までの12日間の観察に基づいた。この期間，前記と同じ冬の野営地において活動に参加した7名が調査対象となった。Domestic unit Z-101 の個体101, 102, 103, 104, と Domestic unit Z-103 の個体301, 302, 303は前期間と同様である。しかし，Domestic unit Z-102 の個体201は冬の野営地を引き払い，同様に個体105も野営地から居住地 L-31 に移動し，期間Ⅲにおける観察記録には現われていない。表2に基づくと，期間Ⅲにおける生業活動の配分に関して次の事が明らかになる。

狩猟活動，罠猟活動は男性優占的活動である。しかし，女性の一人は野営地近域において罠猟活動に従事していることが記録された。個体103の男性も野営地近域における罠猟活動を行なったが，この時，薪の採取活動が重積されている。狩猟活動は，期間Ⅰ，Ⅱと同様，男性の特徴的活動であるが，個体101による狩猟活動期間が表2には見出されない。これは，個体101の養子である個体103がトナカイ狩猟活動に出かけ，個体101は野営地で道具製作活動（特にカンジキ）にたずさわっていたためである。期間Ⅲのはじめでは，個体101と個体103とは共に狩猟活動を行なっていた。しかし，個体103が初めてトナカイの狩猟に成功して以来，個体101は彼に単独で犬ゾリの使用を許したのである。その結果，期間Ⅲの後半では個体101は野営地における道具製作活動に集中し，これに代って個体103が単独で狩猟活動に従事することになったのである。このことは年令による活動の配分と考えることができる。

食物加工活動は期間Ⅲにおいても女性優占的活動であり，これは期間Ⅰa，Ⅰb，Ⅱと同様である。毛皮加工活動も女性優占的活動である。毛皮加工活動に含まれる一連の諸活動は，それぞれの Domestic unit 内で行なわれる。ただし，鞣し皮を燻す仕

表2　個体別の活動利用時間
（1976年3月3日—14日）

活動＼個体番号	101	102	103	104	301	302	303	x	計
FGA	—	0.5	75.0	—	40.0	—	—	22.5	138.0
FPA	—	3.5	—	—	—	4.5	—	—	8.0
HPA	—	6.0	—	—	—	10.0	—	—	16.0
SHA	8.5	—	6.5	—	7.5	12.5	—	8.5	43.5
MA-1	—	10.5	—	—	—	—	—	—	10.5
MA-2	21.5	—	5.0	—	—	—	—	—	26.5
計	30.0	20.5	86.5	—	47.5	27.0	—	31.0	242.5

事において，Domestic unit Z-101 の個体102と，Domestic unit Z-103 の個体302との間に協業が行なわれた。即ち，皮が相方から持ち寄られ，同じ燻し用天幕を用いて皮が燻される。またこの時，皮燻しに先立って皮を袋状に縫い合わせる仕事は個体101が行ない，カラマツの枯木を伐採し薪を作るのは個体302が行なった。煙を出すために薪の上に苔を覆い被せる方法，煙の上に袋状にした皮を吊り下げる方法などは，個体102が個体302に教示した。同様の現象は，期間Ⅰ，Ⅱにおいてオオシカ毛皮加工活動の際にも観察されたが，この時は，皮の削除において個体102が必要な技術，知識を個体302に教えた。具体的には，個体102は，皮の異なる部分における異なる皮の厚さと，削除の際どこに注意を払うべきかを個体302に教示したのである。実際，個体302は活動の間，技術の未熟から二度にわたり削器で皮を破いていたのである。同様に，オオシカ皮の柔軟化の仕事に際しても，個体302が個体102の指導のもとに活動を行なっていることが観察された。皮を柔軟化するには身体的な腕力のみならず長時間継続する体力が必要とされるが，個体102はこの重労働を避け，傍で個体302の仕事を見ながら彼女に指示を与えた。以上の観察から次の二点が指摘される。第一点は，毛皮加工活動に属する一連の諸活動において，年令による活動の配分が見られるということ。即ち，年令71歳の個体102はより豊富な知識や細かい技術を要する仕事に従事し，逆に年令24歳の個体302はより体力を必要とする仕事を行なう。次に第二点として，協業を通じて特定の活動に関する知識，技術が伝達されているということである。

年令による活動の配分は，さらに次の活動においても認められる。例えば，家事活動の中での水汲み，薪割り，火の管理等はもしその Domestic unit 内に子供が居れば彼等によって行なわれる。特にチペワイアンの少女は毎日の種々の家事活動を助ける。15歳以上の少女は，洗濯だけでなく天幕，丸木小屋の掃除も行なうし，また6歳以上の少年，少女が水汲みを行なうことは頻繁に観察される。この意味で，特に住居設営，維持活動における子供の役割りは重要である。

表2に示されている道具製作活動は，皮紐，手袋，カンジキ (Snowshoes) の製作を含む。皮紐，手袋は女性が製作するが，カンジキの木枠は男性が作る。しかし，この木枠に皮紐を張る仕事は女性が行なう。従って，カンジキ製作活動に関しては性による仕事の配分が見られ，野営地における観察によると，個体101と彼の妻である個体102の間で見られた。さらに興味ある事実として，個体103においては彼の年令が15歳であるにもかかわらず，カンジキ製作活動における時間利用が記録された。実際の観察によれば，彼は個体104である彼の弟のために小さなカンジキを製作しようとしたのである。しかし，これは彼にとり最初のカンジキ製作活動の試みであったため，木

表3　食物獲得活動の個体別利用時間と活動の重積
(1975年10月10日—12月15日)

活動＼個体番号	101	102	103	104	105	201	301	302	303	x	Total	計 (%)
H/T	164.5	—	130	—	29.5	164.5	227.5	—	—	—	716.0	771.0 (72.3)
G/T	—	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5	
H/F	6.0	—	—	—	—	6.0	—	—	—	9.5	21.5	
H/C	18.5	—	—	—	3.0	—	9.5	—	—	—	31.0	
G	—	4.5	2.5	2.5	—	—	—	2.5	2.5	—	14.5	14.5 (1.4)
Hf	24.5	—	27.0	—	—	17.5	5.5	—	—	—	74.5	201.5 (18.9)
Hs	4.0	—	8.5	—	20.0	3.5	5.5	—	—	—	41.5	
T	8.5	1.5	8.5	—	3.0	33.5	30.5	—	—	—	85.5	
Fw	3.5	—	7.0	—	—	5.0	15.0	1.5	—	4.0	36.0	79.0 (7.4)
Fi	3.5	1.0	0.5	—	—	8.5	8.5	6.5	—	14.5	43.0	
計	233.0	9.5	184.0	2.5	55.5	238.5	302.0	10.5	2.5	28.0	1066.0	1066.0 (100.0)

枠を曲げる工程で木の柔軟性の判断を誤り，木を折ってしまった。こうして第一回目の試みは失敗に終ったが，彼はもう一度材料を手に入れ，二度目の試みをする。この製作活動において，個体103は彼の養父である個体101の製作活動を観察，模倣しながら，自ら別の材料で製作を試みたのである。この際，個体103が個体101から無理に指導を受けるということはなく，養母の個体102をはじめとする周りの人々からの助言と激励だけが見られた。若いチペワイアンは，彼自身の実際の活動を通しながら技術を習得するのである。同様に，女性における毛皮加工活動においても，知識，技術は一度だけは教えられるが，その後は自分自身で覚え，同じ注意は二度と与えられないという。

以上述べたように，生業活動は性差—年令差に基づいて個体に配分されているが，逆に個体の側から見ると，個体は諸活動を時間的空間的に重ね合わせ調整していることが分る。この現象をこの論文では活動の重積と呼んでいるが，表3において食物獲得活動における活動の重積を時間的側面から検討する。重積される活動として，狩猟—罠猟活動，採集—罠猟活動，狩猟—漁撈活動，狩猟—貯蔵食物回収活動が見られる。貯蔵食物回収活動とは，以前の狩猟によって得られたトナカイ肉を野営地にまで持ち帰らずにその場で雪の下に保存してあるのを回収する仕事である。これら重積による活動期間は，この期間における食物獲得活動の全利用時間1,066時間のうち72.3%を占めている。

狩猟活動と他の活動との重積についてチペワイアンは，狩猟に行く前に同一活動空間で行ない得る他の活動についての計画を立てる。重積された活動が同一地点において行なわれるという可能性は少ないが，両活動のための全体的な活動空間は意図的に重ね合わされるのである。狩猟活動と他の活動との重積は，期間Ⅰ，Ⅱにおける粗放的方法によるトナカイ狩猟活動の不安定性を補うものであると考えることができる。このことは期間Ⅲにおける集中的方法によるトナカイ狩猟活動が他の活動と重積されていないことによっても立証される。

活動の重積は女性の仕事においても観察される。表3に示したように，採集活動は罠猟活動と重積されるが，具体的には，個体はいちご類の食用小果実の採集を行ないながら，リスの罠の設置，点検を行なうのである。この小規模な罠猟活動は，犬ゾリを使用して広範囲を動き回る罠猟とは異なり，野営地近域で行なわれる。さらにチペワイアン女性は，子供の養育活動を他の諸活動と重積させる。冬の野営地には，年令6歳の男子個体104と年令4歳の女子個体303が居たが，女性の成員（個体102，302）は，彼等が野営地外の森林の中に入らぬよう常に注意を払っていた。子供の養育活動には，さらに食事の供与，衣服の着せ換え，洗面，用便の世話が見られるが，これらは女性により野営地において行なわれる他の諸活動——食物加工活動，毛皮加工活動，住居設営・維持活動，道具製作活動——と時間的空間的に重積される。

以上，活動の配分と重積について個体の性差—年令差という観点から述べたが，次にこれに基づいて，チペワイアンの生業活動が全体としてどの様な体系を構成しているのかについて検討する。

3. トナカイ狩猟活動系

チペワイアンの生業活動の体系を，活動の時系列，活動者個体の性差，活動の空間利用という点から総合的に図5に示す。この図において，時系列のはじめの部分の食物獲得活動 (FGA) は男性優占的活動である。罠猟業動 (TA) および漁撈活動 (FA) は男性，女性共に行なうが，女性が行なう時には，その活動空間は野営地近域となる。採集活動 (GA) は女性優占的活動であり，その活動空間は野営地近域である。逆に，狩猟活動 (HA) は男性特有の活動であり，活動空間は野営地外域である。毛皮加工活動 (HPA)，食物加工活動 (FPA) は食物獲得活動 (FGA) からの時系列に続くが，これらは女性優占的活動となっている。時系列の最終過程にある道具製作活動 (MA) は男性，女性共に参加するが，皮，羽，骨を用いる製作活動 (MA–1) は女性優占的活動であり，木材を用いる製作活動 (MA–2) は男性優占的活動である。食物加工活

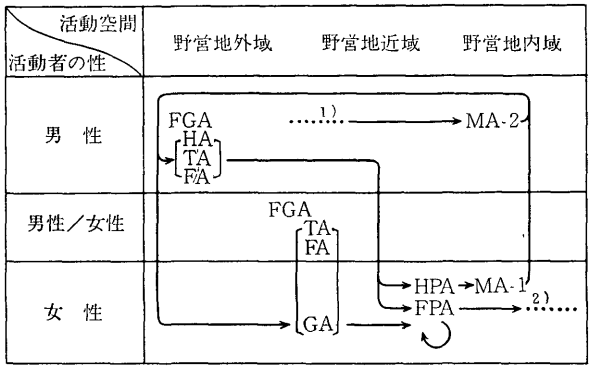


図5　チペワイアンのトナカイ狩猟活動系

FGA：食物獲得活動；　**HA**：狩猟活動；
TA　：罠猟活動；　**FA**：漁撈活動；　**GA**：採集活動；
HPA：毛皮加工活動；　**FPA**：食物加工活動；
MA-1：皮，羽，骨を材料とする道具製作活動；
MA-2：木を材料とする道具製作活動
注 1) 木材は野営地近域において獲得される。
　 2) 食物加工活動 (FPA) は食物消費へと移行する。

動 (FPA) には食物調理と食物保存とが含まれるが，加工保存食料は消費に際し再び調理を必要とする時もある。また，道具製作活動は時系列はじめの食物獲得活動へと再び継続される。

活動の空間利用という観点から検討すると，野営地外域における活動には男性がたずさわり，野営地内域における活動には道具類製作活動の一部を除いて，主として女性がたずさわる。しかし，野営地近域における活動には男性，女性共参加する。

個体の年令と活動空間との関係は以下の様に分析される。即ち，チペワイアンの子供は特に女性をはじめとする大人の保護，監視のもとに野営地内域に留る。しかし，少年になると野営地近域において小規模の罠猟活動を行ない，さらに養父などに連れられて野営地外域で狩猟活動，罠猟活動に参加する。さらに少年自身による狩猟の成功後は，単独で野営地外域における活動が見られる。以上のことから，チペワイアンの男性は年令に従って活動空間を野営地内域から野営地近域，そしてさらに野営地外域へと拡大することが明らかとなる。しかし，チペワイアン女性の活動空間は，野営地内域，野営地近域に留る。

結果的に，生業活動における個体の性は，時系列に従って男性から女性へ，そして再び男性へと変化する。しかし，狩猟活動を除く食物獲得活動（漁撈，罠猟，採集）においては，個体の性は，時系列において女性のままに留ることも可能である。そして，時系列における活動の利用空間は，野営地外域から野営地内域へ，そして再び野

営地外域へと変化する。しかし，興味ある事実として，野営地内域と野営地外域の中間に野営地近域という空間が存在し，ここでは女性，男性共に活動を行なうことが明らかにされた。この空間は女性が食物獲得活動を行なう地域であり，若いチペワイアンの男性が食物獲得活動のために必要な知識，技術を学び，後に活動空間を野営地外域にまで拡大する時の移行帯としての意味を持つと考えられる。

以上述べたように，チペワイアンの生業活動は，トナカイ狩猟活動を中軸にして，活動の時系列，活動の配分と重積という原理に基づき，個体の性差一年令差，活動の時間一空間利用という側面と関わり合いながら，チペワイアンのトナカイ狩猟活動系と呼ぶことのできる活動の体系として構成されているのである。

V．結　　論

人類学における自然人類学と社会・文化人類学という異なった専門分野は，その目的，理論，方法論において特殊化の傾向を辿って来ている。個々の研究成果は各々の研究対象に関する詳細な情報を提供はするが，同時に全体としての人間の把握をますます困難なものにしていることも事実である。生物としてのヒト (*Homo sapiens*) と，そのヒトが作り出して来た文化との相互関係を，自然と人間という広い枠組みの中で論じるためには，各々の専門分野内における既成の理論だけでは，もはや十分とはいえないのである。

この論文において提出された生態人類学的視点とは，ヒトの活動を中軸にしてヒトと自然との間の総体的関係を体系として捉えるものである。新大陸の北方アサパスカン・インディアンに属するチペワイアンに関する研究はこの理論構成を支持する。チペワイアンの生態は，季節的移住の型，生業活動の時間一空間利用として記載される。さらに活動の量的分析により，チペワイアンの生業活動は，ここでトナカイ狩猟活動系と名付けることのできる活動の体系として構成されていることが明らかになった。そこでは，食物獲得活動 (FGA)，食物加工活動 (FPA)，毛皮加工活動 (HPA)，住居設営活動 (SHA)，道具製作活動 (MA) を活動系を構成する主要な活動範疇として考えることができる。

さらに，活動系の構成原理として，活動の時系列（時間的連続性による諸活動の相互関連性），活動の配分（諸活動の各個体への分配），活動の重積（一個体における異なる諸活動の時間的一空間的な重ね合わせ）が，明らかにされた。これらと活動個体の性差・年令差との関係は次の様に述べられる。即ち，時系列の最初の部分である食

物獲得活動 (FGA) は主として男性が野営地外域で行なう。しかし狩猟活動 (HA) 以外の食物獲得活動——罠猟活動 (TA)，漁撈活動 (FA)——は，その活動空間が野営地近域の場合，男性，女性共に参加する。採集活動 (GA) は主として女性の活動であるが，狩猟活動は男性特有の活動であるといえる。毛皮加工活動 (HPA) および食物加工活動 (FPA) は食物獲得活動 (FGA) に続いて行なわれるが，これらは主として女性により行なわれる。時系列の最終段階である道具製作活動 (MA) は男性，女性共に行ない，これは再び食物獲得活動 (FGA) に続く。最後に，チペワイアンのトナカイ狩猟活動系に関して次の事が要約される。

(1) 活動の時系列に沿う各々の活動に関与する個体の性は男性から女性に (FGA→FPA/HPA)，そして再び男性へと (MA→FGA) 戻る。ただし，狩猟活動 (HA) を除く食物獲得活動 (FA/TA/GA) においては，その活動の時系列において女性に留る経路がある。

(2) この時，活動空間は野営地外域（野営地から 1.0 km 以遠）から野営地内域へと移り，再び野営地外域へと移行する。

(3) しかし，野営地外域と野営地内域との中間域として，野営地近域（野営地そのものの外ではあるが，野営地から 1.0 km 以内の地域）の存在が認められ，ここにおける活動には男性，女性共参加する。この地帯は女性の食物獲得活動に利用される空間であり，また，年令の若いチペワイアン男性が食物獲得活動のための知識，技術を学び，後に活動空間を野営地外域へと拡大する際の移行帯となる。

以上の結果に基づき，この論文で提出された生態人類学的方法論は自然と人間との関係という枠組みの中において人間の活動の体系を研究するために有効な手段となることが指摘される。

謝　　辞

本研究の基礎となった野外調査 (1975年7月—1976年10月) において，カナダ国立博物館 (National Museum of Canada) の協力を得た。民族学部長の Dr. Garth Taylor に感謝する。また，研究において御意見と御指導を賜わった Simon Fraser Univ. 社会学・人類学部の Dr. Henry S. Sharp, Dr. Ian Whitaker, Dr. Noel Dyck; 考古学部の Herbert Alexander; Portland State Univ. の Dr. Wayne Suttles; Museum of American Indian (Heye Foundation) の Dr. James G. E. Smith；東京大学文学部　渡辺仁教授；国立民族学博物館　梅棹忠夫館長，祖父江孝男教授，大給近達教授，中村俊亀智教授，小谷凱宣助教授の諸氏に感謝する。

文　　献

CHAPPLE, E. D. and C. S. COON
1947 *Principles of Anthropology*. London: Jonathan Cape.

DAMAS, D. (ed.)
1969a *Contributions to Anthropology: Band Societies*. National Museum of Canada, Bulletin 228, Anthropological Series 84.
1969b *Contributions to Anthropology: Ecological Essays*. National Museum of Canada, Bulletin 230, Anthropological Series 86.

DURKHEIM, E.
1933 (Orig. 1893) *The Division of Labour in Society*. New York: The Free Press.

HERSKOVITS, M. F.
1952 *Economic Anthropology*. New York: Alf. A. Knopf., Inc.

IRIMOTO, T.
1973 Daily Space Use Patterns of Male Breath-Hold Abalone Divers. *Journal of Human Ergology* 2: 59–74.
1977a Daily Space Use Patterns of Traditional Diving Fishermen of Kawaguchi. In H. Watanabe (ed.), *Human Activity System*. Tokyo: Tokyo University Press, pp. 71–89.
1977b Ecology of the Sea-Food Gatherers on the Rocky Coast of Kawaguchi. In H. Watanabe (ed.), *Human Activity System*. Tokyo: Tokyo University Press, pp. 91–116.
1977c「房総漁民の生態」渡辺仁編『人類学講座』第12巻・生態　雄山閣, pp. 251–279。
1977d「房総海士, 海女の潜水採集活動」渡辺仁編『人類学講座』第12巻・生態　雄山閣, pp. 297–312。
1977e「チペワイアン・インディアンの冬の活動について」『第31回日本人類学会・日本民族学会連合会大会発表抄録』p. 21。
1979a An Ecological Approach to the Chipewyan Caribou Hunting System. *Abstracts of the Sixth Annual Congress of the Canadian Ethnology Society, Banff, Alberta*, p. 47.
1979b Ecological Anthropology of the Caribou-Eater Chipewyan of the Wollaston Lake Region of Northern Saskatchewan. Unpublished Ph. D. Dissertation, Simon Fraser University, Canada.
1980「チペワイアンのトナカイ狩猟活動系——生態人類学的アプローチ」『日本民族学会第19回研究大会発表抄録』pp. 17–18。

伊谷純一郎・原子令三編
1977『人類の自然誌』雄山閣。

LEE, R. B. and I. DEVORE (eds.)
1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine.

RAPPAPORT R. A.
1956 Nature, Culture, and Ecological Anthropology. In H. L. Shapiro (ed.), *Man, Culture and Society*. London: Oxford University Press, pp. 237–267.
1967 Ritual Regulation of Environmental Relations among a New Guinea People. *Ethnology* 6: 17–30.

SHARP, H. S.
1973 The Kinship System of the Black Lake Chipewyan. Unpublished Ph. D. Dissertation, Duke University, U.S.A.

STEWARD, J. H.
1955 *Theory of Culture Change*. Urbana: University of Illinois Press.

VAYDA, A. and R. A. RAPPAPORT
1968 Ecology, Culture and Non-culture. In F. Clifton (ed.), *Introduction to Cultural Anthropology*. Boston: Houghton Mifflin, pp. 477–497.

WATANABE, H. (ed.)
1977 *Human Activity System.* Tokyo: Tokyo University Press.
YAPE, W. B. and G. H. BOURNE (eds.)
1957 *The Biology of Aging.* Symposia of Institute of Biology, 6. London.